

第6回スラブ・ユーラシア研究東アジア・コンファレンスに参加して

森下 嘉之（センター）

筆者は2014年6月27-28日に韓国・ソウルで開催された「第6回スラブ・ユーラシア研究東アジア・コンファレンス」に、報告者の一人として参加した。同コンファレンスは毎年、東アジア諸国で開催されている大会であり、スラ研からも多くの報告者が参加されている。筆者は、2012年9月にインド・コルカタで開催された第4回大会に続き、2度目の参加である。今年のテーマは「東アジアの平和構築とユーラシア協力の拡張：ダイナミックスとタスク」という形で基調講演が行われたほか、2日間にわたって6つのセッションに29のパネルが設けられた。昨今のウクライナ情勢を反映して、在韓ウクライナ大使館による報告が設定され、多くの聴衆を引き付けていた。



韓国外語大学校・オバマホール

今年大会は、3月に申し込みが締め切られ、6月末の大会に向けて準備をする運びとなったが、6月という学期の只中にペーパーを用意するのはかなりの難儀であり、締め切り前

までに相応の構想準備を整えておく必要があると感じた。また、大会の詳細（アクセプトの可否、宿情報など）に関する連絡が先方より届くのが遅く、用意されたプログラムに発表者の欠落があるなど、やきもきした部分もあった。しかし、いったん大会が始まれば、ホストやスタッフの方からも懇切丁寧に対応していただき、プログラムも過不足なく進行した。前回は、コルカタという場所柄もあり、ホテルから会場、レセプションに至るまで「完全護衛」の中で行われたことに衝撃を受けたが、今回は札幌から直行便もある大都市ということで、宿手配や交通に関しては特に問題なく確保でき、大会が終われば街中を歩きまわることもできた。少人数のパネル数が多いこともあるが、今回は時間進行に非常に余裕があり（昼食1時間半、休憩各30分）、会場を走り回る必要もなくワンフロアで見ることができたのは有難かった。



筆者とフロアの様子



2日目のレセプション

このコンファレンスでは、地元韓国の参加者を中心に、中央アジア諸国、ロシア、中国、日本からの参加者が多数を占めた一方、欧米からはドイツ、イタリア、ハンガリーなど数名の参加者にとどまった。今回の大会で、前回に比して大きな違いを感じたこととしては、ロシア語での報告が多かったことである。基調講演がロシア語で行われたのをはじめ、ディスカッションの途中でも、旧ソ連諸国の方が聴衆として参加しているパネルでは、いつの間にかロシア語のディスカッションに切り替

わっていたものがあった。そういう意味では、これだけの規模でありながら、欧米基準ではない「ユーラシア」のコンファレンスであることを強く実感した反面、言語的にある種の居づらさも感じた。今回のコンファレンスはソウルの韓国外語大学校・オバマホールで開催されたが、こうした「ユーラシア」な学会が米大統領の名を冠した会場で開催されるのは、何か不思議な因縁である。

さて、筆者が今大会で報告した内容は、「The Social History in Czech Socialistic Housing Complex」と題し、社会主義時代プラハの巨大住宅団地の社会史を扱うものであった。具体的には、「プラハの春」挫折後の1970-80年代にチェコで進展した巨大な社会主義団地に着目することで、社会主義末期から体制転換に至る団地住民と当局の関係に新たな視点を加えることを目的とした。チェコに限らず、社会主義国では全国各地に巨大なモノトーンの住宅団地が建設され、今でも都市景観の基本構造を形作っていることは、旧社会主義圏で過ごされた経験のある方にはお分かりいただけると思う。筆者は、社会主義末期、1989年11月の「ピ

ロード革命」前後にプラハ住宅団地で発行されていた機関紙を題材に、行政側が団地問題に関してどのような働きかけを行ったのか、革命の前後でどのような住民政策が引き継がれたのか、旧権力と市民政党の共通点と相違点がどのように浮かび上がるのかを分析した。「東アジア・コンファレンス」ということで、日本の団地との比較についても触れるつもりであったが、時間の関係と筆者のプレゼンのまずさで、ところどころはしょってしまい、質問にうまく答えられなかったことが残念であった。団地という経験は、日本では1960年代以降、韓国においても経済成長期の1980年代以降に見られたことで、日本と韓国、社会主義諸国をつなぐ20世紀の同時代的経験であるということを何とか伝えなかったのであるが、この点は今後の課題としたいと思う。



学内のカフェ

この大会は、基本的にはパネル報告であり、筆者は個人で申し込んだが、大会では「社会問題(政策)」というパネルとして組み込まれた。筆者のディスカッサントを務められた Kim Kyu-chin 氏は、ホスト校でチェコ語・スロヴァキア語の先生を務められている方で、「ユーラシア」の大海の中でチェコ語を解する方と出会えたのは大変うれしく思った。もっとも、今回の大会では社会史や東欧諸国に関する報告がほかになく、私と組んだもう一人のパネリストは「東アジアにおける人間の安全保障」というテーマ

であったので、(おそらく互いに) パネルとしては厳しいものとなった。やはり、ある程度地域やテーマにおいて共通するパネル報告者と組んで申し込むべきであった。日本やアジアの住宅を研究テーマとしている研究者を巻き込むことも必要だったかもしれない。

最後に蛇足を一点。筆者はこれが初ソウルであったが、韓国では近年、爆発的なカフェブームが巻き起こり、日本未上陸の内外チェーン系カフェが乱立している。コーヒー好きには気になる状況なので、韓国に行かれる機会のある方は是非お試しを。